

監修の序

個々の臨床医がカバーする守備範囲は、広げだしたらきりが無い。きりが無いので専門分野に絞って研修するようになった。専門医の登場である。専門領域の研修に特化することで、高いレベルの医療技術を身に付け、それが近年の医療の進歩にとって大きな役割を果たしてきたことは間違いない。しかし、そのように守備範囲を限定する専門医ばかりになって、問題も生じ始めた。花粉症もちで、膝や肩が痛くて、血圧が高く、胃潰瘍のある人は、耳鼻科と整形外科と循環器科と消化器科を受診しなければならないなくなったり、病院の救急体制も、その日の当直医によって受け入れる患者を選別しなければならない不都合が生じた。

そのような背景の下、2004年より初期臨床研修制度がスタートした。初期臨床研修の理念は、以下のように定められている。

「臨床研修は、医師が、医師としての人格をかん養し、将来専門とする分野にかかわらず、医学及び医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ、一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう、基本的な診療能力を身に付けることのできるものでなければならない」

本書が対象にした事項も、まさにこのような理念に沿って選ばれたものである。本書は、初期研修から後期研修、さらには生涯研修を行う中で、「一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できる」ようになるための本である。その道は容易ではないが、今やすべての医師に求められている。それは個々の医師がどう考えるかは別に、社会の一定のニーズとして、受け入れ、トレーニングしなければならない。自分のやりたいことのみを行うというような医師は、一部のスーパースペシャリスト以外、これからの世の中では生き残っていけないだろう。

生涯にわたって学習をし続けるすべての医師に対し、本書を勧めたい。できる限り患者のニーズを引き受け、幅広い臨床問題に立ち向かう医師が、少しでも増えることを祈って。

2011年3月

名郷直樹